

# 「野菊」考

長谷川 鑛 平

## I

秋もそろそろ深まる頃、路傍や田の畦の、すがれたチガヤ(茅萱)やススキ(芒)のくさむらに寄り添って、野菊の白もしくは薄紫の小花の群れ咲いているのを見かけると、うれしくなる。黄色のものもある。路傍から摘み取って帰った小菊を、一輪ざしにさしておくと、水揚げがよいと直ぐにしゃんと立ち上り、何日ももつ。その小柄で、やせぎすながら、しゃんと芯の一本通った健げさがいっそう好ましくて、私は、野菊の散房花を見つけると、つい摘み取りたくなってしまふ。

一口にノギク(野菊)と言っても、はっきりそれと言い切れず、どうやらいろいろ種類もあるそうなので、例によって、まず『広辞苑』を開いてみた。予期に反して、たった1行、

のぎく〔野菊〕①野に咲く菊。②ヨメナの別称。とあるだけであった。野菊とヨメナとは別のものではなからうか。ちょっと不審なので、さっそく「よめな」の項を見ると、

よめな〔嫁菜〕キク科の多年草。山野・路傍に自生。高さ50～60cm。初秋の頃、淡紫色の頭状花を開く。若葉は食用。ヨメハギ\*。ウハギ。オハギ。ノギク。漢名、鶏兒腸。

とあって、ノギクともあり、さし画も入っている。(※『大言海』よめなの項に、「古名、ウハギ、オハギ、今、ヨメガハギ」とあり、『日本国語大辞典』に「よめがはぎ」はあるが、「よめはぎ」は見出されぬ。ヨメハギは誤りではなからうか。)

\*

最近の『朝日新聞』(昨昭和56年10月17日)の「花の履歴書」(湯浅浩史=進化生物学研究所=筆)に野菊が取上げてあった。

「庭のキクに先立ち、野菊が美しい。日本には

野菊が豊富だが、大きくはキク属〔キク科キク属〕と、シオンやヨメナ類(広義のアスター属)にわけられる。

栽培菊のような〔形の〕葉とにおいを持つのがリュウノウギクやシマカンギクやノジギクなどのキク属。一方、それを欠くのがヨメナやノコンギクやヤマシロギクなどで、花は紫系か白花。

伊藤左千夫の『野菊の墓』は、薄幸の少女との淡い恋を描いた名作だが、その野菊は何であっただろうか。(中略)原作の舞台となったのは千葉県の大塚村、現在の松戸市。政夫が採って、民子が欲しがらる野菊は、田のへりにはえていた。民子の墓のまわりにも野菊は茂る。湿っぽいそのような場所を好む野菊は、分布上、カントウヨメナであろう。ヨメナに似るが、さらに花は濃い紫色に咲く。云云。

ヨメナはあまりに身近すぎたのか、近年にいたるまで栽培の記録はない。

ヨメナに似るが、葉のざらつくノコンギクは、江戸時代には栽培されていた。云云。

アスター属で、日本で最も古くから栽培下にあったのはシオン。12世紀の『今昔物語』には、亡き父をいつまでも思い出すようにと、墓にシオンを植えた男の話がある。これはシオンの中国名の一つ「返魂草」に基づく説話であろう。シオンは漢名の紫苑から由来した。現在では千葉県、中国地方、九州などで野生状態で見られるが、中国大陸やシベリアが原産地である。云云。シオンは強健で、植え放しでも病虫害はあまりない。」

とある。野生種のシオンはともあれ、シオンはふつう野菊のうちには数えられない。

\*

たまたま手もとに『牧野富太郎植物記 I—野の花 1・2』(あかね書房, 1974)という子供向けの本があったので、目次を通覧すると、「野菊」というのはないが、「野の花 I」に「ヨメナ」(107—110 頁)があった。さっそく読んでみた。

春の摘み草としてヨメナ摘みが古くから行われている。ヨメナの若葉は食用としても美味で、独特のかおりがある。春のヨメナはゆでてお浸しにし、またゴマ和えにもよく、汁の実、ヨメナ飯などもこころみられた。ヨメナは、引用記事にもあったように、田の畦や川辺など、多少湿った所に生えるものなので、秋の頃、うす紫の美しい小花をつける。このヨメナの花こそが野菊の代表的なものと、牧野博士はすこぶる当然のこのようにされていた。

古くはウハギ、あるいはオハギと呼ばれ、今日でも地方によってはハギナの名で呼んでいるところもある、とある。『万葉集』にウハギの出でくる歌が 2 首ある。二つとも牧野博士は言及しておられる。一つは、柿本人麻呂が筑紫往返の途上、瀬戸内海、讃岐(さぬき)の狭嶺嶋(さみねしま)で行き仆れの旅人の屍を見て詠んだ長歌(II-220)の反歌 2 首の初めので、

妻もあらば つみてた(食)げまし 佐美(さみ)の山 野の上(へ)のうはぎ[宇波疑] すぎにけらずや(II-221)

〔妻もいたならば摘んで食べもしように。さみね山の野のヨメナはたけてしまっているではないか——沢瀉久孝口訳〕

とあり、もう一つは、

春日野に 煙立つ見ゆ をとめらし 春野のうはぎ[菟芽子] 摘みて煮らしも(X-1879)

〔春日野に煙の立つのが見える。少女らが春の野のヨメナを摘んで煮ているらしいな——沢瀉久孝口訳〕

とあって、沢瀉博士の『万葉集注釈』巻第 2(497 頁)には、宇波疑・菟芽子がヨメナと推定されるにいたった考証経過が詳しく述べてある。もはや定説となっているようである。

『日本国語大辞典』(3-2)には「うはぎ【薺蒿】植物「よめな(嫁菜)の古名」とあって、万葉集の前引、II-221 の人麻呂の歌が挙げられている。「おはぎ」の項(4-2)の方が詳しく、『本草和

名』に「薺蒿菜……和名於波岐」とあり、『十卷本和名抄』に「……崔禹曰、苴草=似テ香、羹〔あつもの〕=作り之ヲ食ス」とあり、源頭忠の「しづのめがをはぎ摘てし春の野に夏は草根を分てやとりぬ」という歌が引いたりしてある。『岩波古語辞典』にも、「うはぎ ヨメナの古名。春の若葉が香りがよく、食用。「のぎく」とも」とある。

牧野博士は江戸の川柳にも言及され、ソリヤ草だこれこんなのがヨメナ ヨメナ—買わしゃりませに道をききの二つがあげてある。当時はヨメナを採って、呼び売りして歩いた者もあったのであろう。

ヨメナは嫁菜で、およめさんのように美しい意と牧野博士はされ、嫁菜に対して婿菜、ムコナというのもある、とある。ムコナとはシラヤマギク *Aster scaber* の別名で、若い葉はやはり食べられるそうである。『大言海』でも「よめハ姫ノ如ク小サキ意」と注釈がつけてある。シラヤマギクについては後に触れるが、ヨメナの学名はふつう *Kalimeris pinnatifida* Kitamura であるが、*Aster linumae* とする向きもある。これらのことについてはやはり後に触れる。

\*

牧野博士は続けて、野菊のなかまには、やはりむらさき色の花をもつノコンギクや、ヨメナによく似ているが、花が薄むらさきでヨメナよりも薄く、中には白い花もあるユウガギクを挙げておられる。

つまり野菊というのは、特定の草本をさす固有名詞ではなく、一種、普通名詞的に、一定の条件をそなえたもの——つまり、野生の、小花をつける菊ないし菊類似の複数の草本を、おおよように、ないしは大ざっぱに、野菊=野の菊と呼び習わしているものであることがわかった。そこで小学館『万有百科大事典』19、「植物」の「野菊」の項を見ると、

野菊のぎく キク科シオン属 *Aster* のノコンギク、ヤマシロギク、イナカギク、ハコネギク、シラヤマギク、サワシロギク、など、ヨメナ属 *Kalimeris* のヨメナ、ユウガギクなどの総称、とすこぶる無雑作に扱ってあって、「頭花がキク属に似ているので俗に野菊と呼んでいる。夏から秋に開花して、山野や野原をいろうどっている」

と説明し、俳句では秋の季語に属するとして、「子狐の隠れ顔なる野菊かな 蕪村」の句が添えてある。ところでわが国にはキク科キク属に属する野生種が20種あまりもある由で、野生の菊である以上、これも「野菊」と呼ばなければならぬまい。素人の私には植物分類学のややこしいことは分らないが、野菊とははたして何か、と素朴に頭をつっこんだところ、事態は単純化するどころか、むしろ複雑化し、紛糾・混迷におちいってしまいかねない仕儀になってしまった。

人事院総裁をつとめた佐藤達夫は、素人ながら植物にくわしく、画も上手なので、植物観賞の著書が幾つかある。その一つ『植物誌——絵と文』(昭和41)は、ユウガギクを採り上げ、「キク科。ふつう、野菊と総称されているもののひとつで、同じなかまのノコンギクやヨメナなどとともに、秋の野みちには欠かせない花である」とあり、「野菊の類は、みなよく似ているが、ノコンギクとヨメナは花が淡紫で、ユウガギクの花は白っぽい。そして枝がいくらか横に張っている。野菊のなかまでは花季がいちばん早く、場所によっては、立秋の前から咲いていることもある」とある。牧野博士が野菊としてまずヨメナ、ノコンギク、ユウガギクの三つをあげられたのと、全く同様の発想法で、何の疑念もさしはさまれず、和名ユウガギクは、やさしい感じから優雅菊とでも書くのかと思ったら、一般には柚ケ菊、柚香菊と書かれる。ただし別に柚子(ユズ)の匂いがするわけでもない、と程程のユーモアも添えてある。

## II

そもそも菊——家菊属——は、学名 *Chrysanthemum morifolium* Ramatuelle というキク科の多年草である。属名のクリサンテムムは黄金を意味する *chrysos* と花を意味する *anthemon* とを合せたもので、種名の *morifolium* はクワ(桑)の葉に似たという意味をもつ (*folium*: 葉)。ラマツエルの命名。そういえば、菊の葉は、葉縁の切れこみがクワのそれにやや似ている。日本語のキクは漢名「菊」の音読みである。漢

字菊には音しかなく、訓はない。漢字の構造としては、菊(キク)が音符で、クサカンムリが草本であることを示す。菊は鞠(キク・キュウ・まり)に通ずる。鞠はあの蹴鞠のまりのことであるが、きわまる・きわまり・ふさがるという意味もあって、窮(キュウ・きわめる・きわまる)と同字であるとされる。事物の窮極、とどのつまり、つまり最終を意味する。李時珍の『本草綱目』(明、1596年刊)に、キクはもろもろの花のうち、年の一番終りに咲くところから菊と名づけられた、とある由である。

キクの起原については多くの説がある。北村四郎は、中国大陸の北部から朝鮮半島にかけて分布しているチョウセンノギクと、中国南部に分布するシマカンギクとが、自然交配をして出来たもので、その時代は唐代(618~907年)か、それ以前、場所は両種の共に自生している中国中部であろうとしている。時代が少し降り過ぎはしないかと愚考する。チョウセンノギクは白色花だが、中には桃、赤、紫色などのアントシアン系色素をもつものもある由。シマカンギクは黄色花で、カロチノイド系色素をもつ。ノギクはふつう周辺の舌状花が白色ないし淡紫色系であるが、中心の管状花はいずれも黄いろく、アワコガネギクのように全体が黄色のものもある。現在の栽培菊(家菊)にはアントシアン系色素をもつものも、カロチノイド系色素をもつものもあって、色彩はすこぶる豊富である。

いずれにせよ主に朝鮮ノギクとシマカンギクとが交雑して中国中部において出来たらしい。それが朝鮮を経て、大和時代に日本に伝わったらしいと『世界大百科事典』にある(春山行夫・佐竹義輔)。大和時代とは大和、つまり奈良盆地に都があった時代ということで、延暦13年(794)の平安遷都以前ということになる。ところで丹羽鼎三は、種々古文書などを研究して、キクが中国からもたらされたのは797(延暦16)年ごろであるとしておられる由であるが、はたしてそうであったとすれば、中国では唐代(618~907)の中に含まれるので、前記、キクの成立を唐代とする説とは矛盾しない。しかし、天平勝宝3年(751)に成立したとされるわが国最初の漢詩集『懐風藻』にすでに若干、菊に言

及してある詩句が見出されるのを、何と受けとるべきであるか。

(1) 境部王(天武天皇の孫、穂積皇子の子、養老5-6年(721~2)頃、25歳で没)の作「五言、秋夜山池ニ宴(うたげ)ス」1首に

峰ニ対(むか)イテ菊酒ヲ傾ケ、水ニ臨ミテ桐琴ヲ拍(う)ツ。婦ルヲ忘レテ明月ヲ待ツ。何ゾ憂エム夜漏(やろう、漏は水時計)ノ深キヲ。

とある。菊酒は菊花酒で、菊の花と葉とを穀類に混ぜてかもした酒の由であるが、それを九月九日の重陽の節に飲んで、不祥をはらい、長寿をいのるという中国の慣例が、もうはいってきていたのであろうか。文字上だけの空辞とは思われない。もっともすでにちゃんとした菊酒が用意してあったのではなくて、あり合せの酒に菊の花びらを浮かべて飲んだに過ぎなかったのかも知れない。いずれにせよ「菊酒を傾け」と、ちゃんと書いてある。

その山池というのは、貴人の邸宅の池泉や流水を配した庭園のことであろうが、恐らくは当時、政権の座にあって羽振りのよかった長屋王(676~729、天武天皇の孫、高市皇子)の、佐保の邸館の庭園であったかも知れないと憶測される。この庭園ではしばしば宴会が催されたらしく、それに関説した詩が『懐風藻』にはいくつか載っている。

その一つ(2)田中朝臣浄足の「五言、晚秋長王ガ宅ニ宴ス、一首」に「巖前ニ菊気芳シ」という句があり、(3)長屋王自身の「五言、宝宅ニテ新羅ノ客ヲ宴ス、一首」に「桂山ニ余景下リ、菊浦落霞鮮(あざ)ラケン」〔香木桂のにおう山には残る夕日の光が映え、菊のかおる浦には低くたなびく夕やけの霞があざやかである〕という句が見出される。

その同じ賀宴に列席したらしい(4)安部朝臣広庭の「五言、秋日長王ガ宅ニ新羅ノ客ヲ宴ス、一首」に「斯レ浮菊ノ酒ヲ傾ケ、願ワクハ転蓬ノ憂ヲ慰ムム」という句がある。ここは正に、酒に菊の花を浮かべたもので、転蓬というのは、風に飛ばされるヨモギのことで、客人のはるばるシラギから来た遠路の旅のつかれを言ったものである。古代のレトリクはなかなか大げさで、凝っている。

さらに(5)藤原朝臣宇合(藤原不比等の三男、737年没、年44?)、あの著名な宇合の「七言、秋日左僕射長王宅ニ宴ス、一首」に「蘭ヲ露ヲス白露未ダ臭(か)ヲ催(うなが)サズ、菊ニ浮カベル丹霞自ラ芳(におい)有リ」の句がある。

当時天下人であった長屋王の宏荘な邸館には、流水・池泉のある手のこんだ豪華な庭苑があり、その池泉のほとりに、当時唐から渡来したばかりですこぶる珍らしかったであろう菊が、すでに植えられて、芳香をはなっていたものと考えてよさそうである。そうになると丹羽鼎三の延暦16=797年移入説よりは、長屋王が突如失脚、自尽した天平1=729年をめぐりしても、70年程もさかのぼることになる。しかし、これはおそらく栽培菊=家菊のことで、野生の菊はやはり、宮廷人の目にはまだ遠かったことであろう。しかし自生の野菊はこのようなこととは関係なく、野原につつましくその色どりを添えていたことであろう。『懐風藻』よりは20~30年おくれて成立したとされる『萬葉集』に、ウハギをうたった作品が2首あることは、先に触れた。ウハギがヨメナであり、しかも、いずれも食用として言及されている。だから、野の花としてのヨメナが、野をいろいろ野菊として万葉人の意識の中にあっただろうかは、たやすくは断じがたいものがある。文字通りの菊への言及は、『萬葉集』には全く見られない。

\*

『懐風藻』に見る限り、菊はその美、その芳香を觀賞するよりも、菊酒として不祥をはらい、延命長寿をもとめる呪術・俗信的関心に出たものであったかも知れない。どうも菊は初め主として薬用植物として紹介、移入されたものらしい。927年(延長5)撰上の『延喜式』には黄ギクが薬用として献上された記録がある由である。(今、食用しているシュンギクも黄菊である。)

770年頃成立した『万葉集』には、菊への言及は、叙上ウハギに関してはともかく、全くない。905年の『今古集』や1000年頃成立した『源氏物語』の時代になって、ようやく菊は文芸作品に採りあげられるようになった。『源氏物語』に現われる草本は、ナデシコ24回、キク20回、オミナエシ15回で、菊は実に第2位を占めている。

初めて菊花の宴の催されたのは、天武天皇の

14(686)年9月のこととされる。『日本書紀』巻第29、天武天皇14(686)年「九月の甲辰の朔壬子に、天皇、旧宮の安殿の庭に宴(とよのあかりきこしめ)す」とあり、「日本古典文学大系」本の頭注に「類聚国史はこの宴を歳時部九月九日(重陽の宴)の項の最初に掲記する」とある。9月9日ではなく、正しくは9月1日(朔=ついたち)に、皇太子草壁皇子以下、大津・高市・川島・忍壁の諸皇子も参加した相当盛大なパーティであったらしいが、9月9日ではなく、別に重陽の宴とはことわってない。こじつければ、ここらあたりを重陽の節会の始まりとしてよいだろう、という程度のことはあるまいか。

かつては陽数、すなわち奇数は偶数よりもめでたい数字とされ、その陽数の最も大きいものが9、その9が九月九日は二つ重なるので、めでたい上にもめでたい、そこで重陽として貴重した。だからこの日は野外に宴遊して、菊酒を喫し、悪気邪気を払い、延命長寿をことはいだのである。

ちなみに奇数の重なる旧暦1月1日(人日)、3月3日(上巳)、5月5日(端午)、7月7日(七夕)、9月9日(重陽)をごせっく(五節句・五節供)と言うことは、言うまでもない。但し1月だけは1月7日に移して、「ななくさ」と称し、七種粥(ななくさがゆ)を祝う習わしとなった。

### III

野菊といえば、俳句の好対象であって、秋の季語に属する。全国に遍在する俳人たちが、それぞれ郷土のいわゆる野菊を採り上げて句作しているのであろうと見当づけて、周辺の歳時記をのぞいてみた。期待通り若干の言及を見出すことができた。たとえば、角川書店編、合本『俳句歳時記』新版(昭和49)には

「野菊 のぎく

「山野に自生する菊の総称。〔1〕泡黄金菊(アワコガネギク)を別名野菊といい、また〔2〕野路菊(ノジギク)を野菊という場合もあるが特定のものではない。野路菊は栽培菊の学問上の原種で、花は白色、まれに帯黄色で中心が黄いろい。泡黄金菊は泡のように黄色の小花をつける。このほか〔3〕油菊(アブラギク)、〔4〕野紺菊

(ノコンギク)、〔5〕磯菊(イソギク)、〔6〕浜菊(ハマギク)などがある。〔7〕柚ケ菊(ユウガギク)、〔8〕山白菊(ヤマシロギク)、〔9〕沢白菊(サワシロギク)など嫁菜に似ており、〔10〕藍菊(アイギク)は土佐、〔11〕薩摩野菊(サツマノギク)は薩摩、〔12〕虹ケ浜菊(ニジガハマギク)は周防の虹ケ浜にそれぞれ野生が多く、いずれも秋の山野を美しくいろどる。」

とあって、有名俳人の句が10句引いてある。歳時記などに引かれる句がどうしてこうまづいものばかりか、私は日頃不審に思っているが、ここでも、すべてここに改めて引きたくなるほどの作に乏しい。この歳時記の編者は嫁菜が野菊の代表的なものの一つであることに、ことさら目をふさいでいる嫌いがある。果然、「嫁菜」は別扱いして、春の植物の部に挙げられているのであった。

「嫁菜 よめな 萩菜・をはぎ・よめがはぎ」  
「多少湿気のある土地に生じる多年草で春の摘み草の代表、茎の高さ30センチから45センチぐらい。あまり生長せぬうちに、わかい茎と葉を摘んで、浸しものなどにして食べる。菊に似た香気があり、花は秋開くので、一般は野菊と呼んでいる。」

とあって、例句4句。いずれも摘み草としてのものである。

しかし、叙上では、野菊の概念はまだつかめない。雑然と列挙しただけである。そこでもう一つ、山口誓子編『俳句歳時記・植物・秋』(カラーブックス)を見てみた。「野菊のぎく 山野に自生する小菊の総称。花は白、黄、紫と色さまざまに秋の野山を美しく彩る。白色の小菊に兵庫県の郷土の花野路菊〔ノジギク〕があり、7～9月、可憐な花が咲く嫁菜〔ヨメナ〕も野菊とする」とある。ヨメナと共に、ただ一つノジギクに言及してあることが注意を引く。この歳時記にも10句、例句が挙げてある。この方がややましである。

\*

野菊を考える上で俳句歳時記のほとんど役立たぬことを知って落胆した。ここまでに分ったことは、一般にキクと称されるものには、野生ギクと栽培ギク(家ギク)とがあり、その栽培ギクは主として観賞用に仕立てられたもので、開花期によって夏ギク・秋ギク・寒ギクと分けられ、花の大小

で大ギク・中ギク・小ギクと分けられ、更に形態によっていろいろとこまかく分類されている。その一方に料理ギク・薬用ギクというものもある。しかし、私の問題とするのは、いわゆる野菊であるが、野生ギクすなわち野菊と簡単には言えないようである。というのは、私どもには、どうやら、野菊というイメージ、ないし擬似原型 *Pseud-Archety* がもはや出来ていて、それにあてはめて暗黙裡にこれは野菊、あれは野菊でないとしているものようであるからである。

植物の分類はむつかしくて、私ども素人にはすこぶる分りにくい、ともあれキク科 *Compositae* というのは、種子植物の中で最大の種数をもつ科で、約 900 属、1 万 4000 種が知られているとか。現在知られている種子植物全体の約 10% にあたる由で、分布もほぼ世界中にわたっているが、不思議なことに熱帯雨林には余り見られない。高山植物から沼沢や海辺まで到るところに分布しているが、大部分は草本であるという。信州の中高山帯に見られるイワインチンは、まぎれもなく高山野菊である。

キク科植物の何よりの特徴は、多数の花が集って頭状花房をつくることである。この頭花は周囲を総包という通常の花のガクにあたるものに包まれる。つぼみのうちは頭花全体を押し包んで保護する。花柄の先端は平たい円盤状の花盤となり、その多少盛り上った花盤の上に多数の小花が密集するわけであるが、その配列は、外周から中心部へ向かって求心的にびっしり並び、ふつう外周部は舌状花群、中心部は管状花群である。属によってはタンポポのように頭花全部が舌状花でできているものもあれば、アザミのように全部管状花であったりするものもある。キク科は大別してキク亜科 (*Asteroideae* 又は *Tubiflorae*) とタンポポ亜科 *Lactucoideae* (又は *Liguliflorae*) とに分けられる由であるが、その主要な区別点は、前者が管状花を主とするのに対し、後者は頭花全体が舌状花でできていることである。舌状花はふつう雌花で、おしべがない。これに対し管状花は、先端の二裂した 1 本のめしべ(花柱)を、5 本のおしべがとり囲んでいる。種子は典型的な瘦果(ソウカ)で、冠毛をもつものが多い。キク科の植物がこのように多数の小花が密集してめだつ頭花をつくるのは、

昆虫を能率的に引きつけるためであって、虫媒花の種子植物としては最も進化したものの一つと考えられる。

さて、今はタンポポ亜科は論外として、キク亜科に属するものは、かなり多いが、菊、もしくは野菊に関連のあるものだけを挙げると、まず、

#### 1. シオン(コンギク)族——

シオン(コンギク)属 *Aster*, アキノキリンソウ属 *Solidago*, ヒメジョオン属 *Eigeron*, ヒナギク属 *Bellis* など。

#### 2. キク族——

キク(クリサンテムム)属 *Chrysanthemum*, ノコギリソウ属 *Achillea*, ヨモギ属 *Artemisia* など。

#### 3. キオン(サワギク)属——

キオン(サワギク)属 *Senecio*, フキ属 *Petasites*, コウモリソウ属 *Cacalia* など。

と言ったところであろうか。

問題は、結局シオン(アステル)属とキク(クリサンテムム)属に絞られそうであるが、シオン属からヨメナ類を別属扱いにしてヨメナ属 *Kalimeris* を立てる仕方もあるようである。この方に従う。

キク属は大半が家菊として栽培菊で占められるが、若干、野生種として「野菊」の仲間にはいるものがないわけではない。

\*

そこでまずヨメナ属から始めることとする。

#### (I) ヨメナ属 *Kalimeris*

1. ヨメナ(嫁菜) *Kalimeris Yomena* Kitamura. (シオン属としては *Aster yomena*) ヨメナについては冒頭に牧野富太郎博士の文章を相当大量に引用したので、いささか重複のきらいなきにしてもあらずであるが、概説すると——

キク科キク族ヨメナ属の多年草。原野や田のあぜ、野道の路傍など、やや湿った肥料分の多い所に生える。地中に根茎があって、旺盛な繁殖力に恵まれ、茎は高さ 30~100 cm に達し、紫色を帯びることが多い。葉は互生し、披針形で、あらい鋸歯があり、上面はなめらかで、ややつや(光沢)がある。披針形(ひしんけい)というのは、全体が細

長くて先端がとがり、基部は逆にやや広がっている形で、例えば竹の葉のような形である。はじめ葉や茎は軟く、ふつう赤味を帯び、その頃摘んで食べると、一種の香りがある、なかなか宜しい。やがて赤味が消え、いくらか紫色がかかった緑色になる。すると、もう固くてとても食べたものでなくなる。7～9月、分岐した枝の先に径2.5 cmぐらいのうす紫の頭花を開く。結実して瘦果となり、剛毛状の短い冠毛がつく。本州の東海地方から四国、九州、南朝鮮に分布し、昔はその若葉を好んで食べた。摘み草といえ、ヨメナとヨモギが主な対象であった。(ヨモギ属もキク属と同格の間である。)花はなかなか美しく、楚楚として可憐なところから「嫁菜」と名づけられたとも言われるが、つましく、多少淋しげなところがやはり捨てがたい。

関東や東北地方に見られるものはカントウヨメナと言って、花がひとまわり小さく、山菜としては味と香りがやや劣る。

## 2. ユウガギク (柚香菊) *Kalimeris pinnatifida* Kitamura (*Aster linumae*)

キク科キク族ヨメナ属の多年草。山野の日当りのよい草地に生え、地下に長い根茎があり、茎は高さ30～100 cmになる。葉は互生して薄く、卵状長楕円形で、長さは7～8 cm、茎の中程以下につくものは、羽状に中裂、または深裂するが、上部や枝につく葉は披針状で、切れこみは浅い。茎は上部でいくつか枝分れし、しかもその枝が斜めに大きく張り出すのが特徴である。8～10月、その四方に分岐した茎の先に多数の頭花を散房状につける。頭花は径2.5 cmの内外、周辺の舌状花は白色または淡紫色、中心の管状花は黄色である。本州中部の近畿地方から北へかけての特産種で、どちらかといえば山地に多い。一部重なってはいるが、西の代表とも言うべきヤマジノギク(3)と縄張りを分け合っている。(富成忠夫『秋の花』野草ハンドブック3, 26頁)

## (II) ハマベノギク属 *Heteropappus*

### 3. ヤマジノギク (山路野菊) *Heteropappus hispidus*

山野に自生するキク科の越年草で、分類上、ハマベノギク属 *Heteropappus* に属する。取りあえずここに入れておく。というのは、ヨメナ(1)、ユウガギク(2)、ノコンギク(6)などと共に一般に野菊と呼ばれるものの代表者の一つで、しかも、花が大きくて最も美しいとする向き(富成忠夫、『秋の花』24頁)もあるからである。富成は、アレンノギク(荒れ野野菊)とも言いが、山路野菊の方が名前としてよりふさわしいと言う。関東地方より北をユウガギク(2)が支配しているのに対して、本州の中部から四国、九州にわたって繁殖し、朝鮮、中国にも分布している由。茎は直立し草丈は30～100 cm、頭花は径3～5 cm、野菊としては大きめで、中心部の黄色の筒状花を、青味がかかった淡い紫色の舌状花の、長さ1.5～2.5 cmのが取り囲んで、見た目になかなか豊かである。九州などでは海岸から高みまでずっと生えていたりする。海岸のものは茎や葉が潮風に洗われてゴツクなり、一見別種のように見えることもある。ヨメナによく似ているが、特徴は、実につく冠毛が、舌状花のものはごく短く、筒状花のものが長いことで、花を分解してみれば、たやすく確められると言う。

### 4. ハマベノギク (浜辺野菊) *Heteropappus hispidus* Less. var. *arenarius* Kitamura

2年草、海岸に生え、茎は根ぎわから四方に倒れて広がり、その先端に高さ20～30 cmの茎が立つ。葉は互生し、縁に毛がある。夏から秋にかけて7～10月、径3～5 cmの大きめの頭花を開く。舌状花は紫色(藤色)で1列に並び、管状花は黄色で、たっぶりある。本州の中部、富山県より西の日本海側と九州に分布し、海浜の砂地に自生する。

## (III) シオン属 *Aster*

シオン属というからには、シオン属の野菊列伝にはいる前に、どうしても一言、シオンそのものに触れておかななくてはならない。

### 5. シオン (紫苑) *Aster tataricus* L. t.

キク科の多年草。日本・朝鮮・中国北部・シベリアに野生し、日本でも中国地方や九州地方の山地に時に野生のものが見られる。古くから人家にひろく栽培せられてきた。茎は直立して高さ2 m

にも達し、葉と共にざらざらしている。9～10月、茎の上部に小枝を出し、多数の頭花を散房状につける。黄色の管状花の周りを、高貴な感じの淡紫色の舌状花が取りまき、見るからに颯爽としている。

(シオンに似てずっと小型のものにミヤコワスレ(都忘れ)というのがある。ミヤマヨメナ(深山嫁菜) *Gymnaster savatieri* Kitam. の栽培品種である。やはりキク科の多年草であるが、草丈20～50cm、5～7月、径3cmぐらいの頭状花をつける。舌状花は紫色または白色、管状花は黄色で、形はヨメナによく似ている。本州、四国、九州の特産であるが、瘦果に冠毛がないので別属とされる。江戸時代から観賞用として、庭や鉢に植えられている。)

いずれも野菊の原型を思わせるが、栽培種だけあって、何となく栄養がよく、ゆたかで、特にシオンは2mも草丈があって、見上げ気味のところに散房花がつく。これに対して野菊は野原の孤児とでもいうか、やせて、茎も細いが、そのくせ針金のように芯が強く、花もシオンに比べて小振りではあるが、孤高をほこるがごとく、小さいながら、しゃんと形をととのえて、雑草の中に群れ咲くさまは、やはりあっぱれである。庭に植えてみると、茎は行儀わるくよろけたりするが、花は型通りの小花をしゃっきりと開くので、可憐である。

#### 6. ノコンギク(野紺菊) *Aster ageratoides* Turcz. *ovatus* Nakai.

キク科シオン属の多年草。ふつう日当りのよい野山に生える。草丈は30～60cm、1mに達するものもある。葉は互生し、卵状楕円形で、顕著な3脈があり、表裏両面にかたい毛があって、ざらつく。夏から秋にかけて多数の頭花を開く。径2.5cm内外で、中心の管状花は黄色で、これを取りかこむ周辺の舌状花の色は、白っぽいものから紫に近いのまでいろいろあって、美しい。ヨメナ(1)によく似ているので、混同されることが多い。花を分解してみると、長さ5mmぐらいの冠毛があればノコンギク、ほとんどなければヨメナである。葉のざらつくのもノコンギクの一特色で、ヨメナはなめらかである。瘦果には褐色の冠毛がある。名前は「野に咲く紺菊」の意味とあるが、「残ん菊」と私は取

りたい。本州・四国・九州に分布し、葉の広いものや狭いもの、花の色の変ったものなど、いろいろの型のものがある。

栽培種のノコンギク(紺菊) *Aster ageratoides* Turcz. *subsp. ovatus* Nakai *f. hortensis* Ohwi は、このノコンギクの改良種で、耐寒性多年草、鉢植えもされる。頭状花の径は約3.5cmでかなり大きめで、中心の管状花の黄色を囲んで周辺舌状花の濃紫色が目立つ。

#### 7. ヤマシロギク(山白菊) *Aster ageratoides* Turcz. *subsp. leiophyllus* Kitam.

キク科シオン属の多年草。別名をシロヨメナ(白嫁菜)というがヨメナ属 *Kalimeris* ではない。野山の木かげを好んで生え、草丈は30～70cmに達する。葉・茎ともに黒緑色で、多少つやがあり、なめらかなものとざらつくものがある。9～10月、茎の頂に径約2cmの頭花を散房状につける。舌状花は白く、管状花は黄色で、紫がかかったノコンギクによく似ている。ただ葉がやや細めで、葉の基部は茎を抱かない。本州・四国・九州・台湾に分布する。

これによく似たものに(7')イナカギク(田舎菊)がある。 *Aster semiamplexicaulis*。キク科シオン属の多年草、高さ50cm内外。全草に白色の軟毛が密生し、そのため浅緑色に見える。葉は披針状か長楕円形で、長さ6～12cm、下部が狭まって茎をちょっと抱くような恰好につくのが特色で、前者と区別できる。管状花は黄色、舌状花は白色、時に淡紫色で、本州の中部以西、四国・九州などの、これは日当りのよい丘陵地や山地に多い。

#### 8. シラヤマギク(白山菊) *Aster scaber* Thunb.

キク科シオン属の多年草。山地の木かげや草原に生えて、高さ80～150cm、なかなか草丈が高い。葉にも茎にも、葉は両面に、細毛があって、ざらつくが、茎の下半分はなめらかで、うす白く粉をふく。葉は卵形心臟形で、縁は鋸歯状、他の野菊類に比べて、ずっと幅広いのが特徴である。根出葉の表面に無性芽のような虫こぶができることがある。8～10月、多くの頭花を散房状につける。径2～2.5cm、黄色の管状花を白色の舌状花が取り巻くが、その数は少なく、且つ不揃いで、イナ



カギク(7')に比べて何となく物淋しい。しかし、この歯の抜けたようなわびしさに、野菊特有のひなびた野性味を賞味するひともある。日本全土、朝鮮、中国にも分布している。黄芽をムコナ(むこ菜)と言って食用にもなる。無論ヨメナに対しての名で、東北地方ではムゴナと濁るところもある由である。

\*

近縁種にサワシロギク・ゴマナ・ハコネギク・ウラギクなどがある。

9. サワシロギク(澤白菊) *Aster rugulosus* Maxim. 酸性の湿地に生え、草丈は50~60 cm, シラヤマギクに比べてずいぶん小さい。葉は披針状で細長く、上面の葉脈がへこんで、しわ状になっている。本州・四国・九州に分布。

10. ゴマナ(胡麻菜) *Aster Glehni* Fr. Schm. var. *hondoensis* Kitam. 山の湿地に群生する多年草で、高さ1~2 mにも達する。全体に細毛があつて、ざらざらする。夏から秋にかけて径1.5 cm内外の頭花をたくさんつける。胡麻菜の名は恐らくその長楕円形の葉の形によるのであろう。

11. ハコネギク(箱根菊)〔ミヤマコンギク=深山紺菊〕*Aster viscidulus* Makino

多年生草本。地下茎は横臥するが、匍枝も出す。直立、高さ20~60 cm, 頂部で分枝し、7~10月、散房状の頭花を多数つける。径2~3 cm。管状花は黄いろく、舌状花の花冠は紫色(または汚白色)。本州中部、ひなたの山地に自生する。

12. ウラギク(浦菊)〔ハマシオン=浜紫苑〕*Aster tripolium* Linne

越年性草本(半地下植物)。地上茎は高さ30~100 cm, 無毛、葉は線状披針形で、やや肉質。9~11月枝頭に頭花をつける。径2 cm内外。管状花が多く、黄色。舌状花は紫紅色。塩水のさす沼地、砂地などに生え、北海道、本州、四国、九州に自生する。

### III. キク(クリサンテムム)属

叙上、いわゆる野菊を追求してみると、キク科キク属ではなくて、巨大家族を擁する同じキク科には属するが、キク属とは並列する、しかし別個のヨメナ属、シオン属、つけたいり的にハマベノ

ギク属に属するものが多く、しかも「野菊」のイメージをきめているものがむしろヨメナ、ユウガギク、ノコンギクであることが分つて、ちょっと驚く。しかし、菊といえばやはりクリサンテムム属で、栽培種がやはり、圧倒的であるにもかかわらず、野生種も必ずしも少なくはない。ノジギク、リュウノウギク、ハマギク、全体が黄いろいものとしてはアワコガネギク、イソギクなど、野菊としても重要なものが数数あるのである。やはり舌状花がアントシアン系の、白色ないし淡紫色のものが多いが、カロチノイド系の、管状花・舌状花ともに黄いろいものは、この属にしかないようである。われわれ素人の目に触れる雑本では、学名の添記してないのが通常なので、中には他属に属するものが紛れ込まないとも限らないが、以下、花の白、ないし淡紫色のものから、アト・ランドムに列記してみよう。

13. ノジギク(野路菊) *Chrysanthemum japonese* Nakai

キク科キク属の多年草で、西日本の海岸の崖地や、山麓に生える。茎は高さ60~80 cm, 上部で小枝に分れ、葉は円卵形で互生し、長さ3~5 cm, 3~5片に欠刻し、裂片には少数の鋸歯がある。上面は深緑色であるが、下面に灰白色の毛が密生して、いかにも菊の葉である。10~11月頃、多数の頭花をつける。径3~4 cm, 野菊としては最も大きめのものに属し、舌状花はふつう白色であるが、黄色がかったものもある。四国から九州に分布する。直径4 cmという大きめの白い花が多数群れ咲いて、海辺の崖地の一角に垂れ下がっている光景は、まことにみごとである。栽培小菊の懸崖作りは、この光景を、人工的に再現しようとしたものであろう。

タイプとしては、四国や九州の太平洋側に生えるものと、瀬戸内海沿岸に生えるものと2通りある。後者は葉の質が薄く切れ込みが多く、これをセトノジギク(瀬戸野路菊)といい、兵庫県の県花になっている。太平洋側のは一般に葉の切れ込みは少ないが、葉は特に厚めで、毛が多くて銀白色を呈し、これをアズリノジギク(足摺野路菊)と言う。主として四国の西南部に分布する。昭和52(1977)年12月7日付「朝日新聞」の「冬に咲

く花」欄に矢野勇の「ノジギク」という一文が載っていた。11月も終りに近い頃、四国南端足摺岬を訪れた。ヤブツバキの林の中の急な小路を下りて、玉石のころがる浜べに出たところ、枯れ草の中にノジギクの一群れが咲いていた。岩のすき間に根をおろし、下に向かって垂れ下がった枝・枝に白い花がいっぱい。野菊と呼ぶにはあまりにも大きく見事で、しかも、園芸種にはない一種の品格をさえ感じさせた。それにしてもノジギクとは、何とこの花にふさわしい名前であることか。牧野富太郎博士の命名という。花の大きさが3 cm以上もあり、がっしりした茎の上に群がって咲く。葉裏の銀白なもの人目をひく。リュウノウギク(14)のような心持ちさびしげな花を見つけた目には、ノジギクは余りにも立派に見えた、と矢野勇は書いている。

14. リュウノウギク (竜腦菊) *Chrysanthemum makinoi* Matsum. et Nakai.

キク科キク属の多年草。低山や丘陵地の日当りのよい崖などに生え、茎の高さは40~80 cm。葉は互生し、卵形で三つ切れこみがあり(3中裂)、基部はくさび形である。表面は濃い緑で細毛におおわれ、裏面には灰白色の毛が密生している。頭花は径3 cmで、野菊としては最も大きいものの一つで、管状花は黄色、舌状花は白色であるが、時に淡紅色(ピンク色)をおびることがあって、中心花の黄色とのコントラストが宜しい。10月から11月に枝先に群れ咲く。葉をもむと竜腦(ボルネオール)に似た香気がある。竜腦は南方、ボルネオ、スマトラ原産のフタバガキ科の常緑喬木から採れるもので、その香りは樟腦に似ている。「竜腦菊」の名のある所以である。本州から四国、九州にまで分布するとされるが、本州も主として福島県以南と四国、九州の宮崎に見られ、東京付近にも多く見られる。

15. ハマギク (浜菊) *Chrysanthemum nipponicum* Matsum.

キク科キク属の多年草。関東北部から東北地方の太平洋岸に分布する。南限は茨城県の日高市付近で、海岸の崖などに生え、青森県にまで及んでいる。茎は50~100 cm、下部は低木状であるが、上部は柔らかく、やはり草本である。密接して互

生する葉は、へら形、ないしサジ形で、上部に鋸歯があり、肉質で厚く、表面にはつや(光沢)があり、葉柄はない。舌状花は白色で、管状花は黄色。その花は野菊の仲間では最も大きく、直径5~6 cmもあり、見た目に美しいので、よく庭にも植えられ、花屋の店頭にみかけることもある。花後、三角柱状の果実をむすぶ。ジャスター・デージー *Chrysanthemum Burbankii* はこれとフランスギクとの交配種だと言われる。

浜菊に海嘯(つなみ)は古き語り草 風生。

16. コハマギク (小浜菊) *Chrysanthemum yezoense* Maekawa

同種のものに、同様の土地柄のところに生えるユハマギクがある。関東北部、茨城県を南限として太平洋岸に分布し、北海道に及んでいる。海岸の岩の上や草地に生え、ハマギク(15)と混生していることが多い。長い根茎があり、茎は高さ10~50 cmで、その点、まさに小ハマギクである。縁に浅い切れこみのある卵形の葉は、厚く、もとがくさび形となっていて、長い葉柄のあるのが、ハマギクと区別されるもう一つの特徴である。花は茎の先に一つずつつき、管状花は黄色、舌状花は白色で、径4~5 cmと大振りではあるが、前者に比べてやや小さく、文字通り小ハマギクであるが、またマーガレットにそっくりでもある。その白色が後に紫紅色に変わる。花期は9月から12月。(たまたまマーガレットに言及したが、これも栽培種ながら *Chrysanthemum frutescens* L. と称して、キク科キク属に属する。)

なお北海道日本海沿岸に生える17. ピレオギク(エゾソナレギク) *Chrysanthemum weyrichii* Miyabe もハマギクの仲間である。

18. サツマノギク (薩摩野菊) *Chrysanthemum satsumensis* Mak.

前出ノジギク(13)と同じ系統のもので、一連のノジギクの学名上の母種である。九州南部、鹿児島県の西側にだけ分布し、海岸の崖などに生える。葉は切れこみが少なく、裏には銀白色の毛が密生している点、四国のアズリノジギクに似ているが、花は黄色の管状花群を白い舌状花が取りまく白野菊型で、直径が4~5 cmもあって、ずっと大

きく、これは本州北部のハマギク(15)、コハマギク(16)に匹敵する。写真で見ると、舌状花の数が、サツミノギクの方が少し少なめで、それだけあっさりしているように見える。花・葉ともになかなか立派で、ノジギクの仲間では最も格調の高いものである。花期は11~12月で、初冬の菊である。

\*

同じクリサンテムム属に属するが、管状花も舌状花も黄いろくて、全体として黄いろい種に移ることにしよう。

19. アワコガネギク(泡黄金菊)*Chrysanthemum boreale* Makino.

キク科キク属の多年草。キクタニギク(菊谷菊)、アブラギク(油菊)とも言う。茎は高さ1~1.5mで、ずば抜けて高く、上部で分枝し、白色の毛でおおわれる。葉は羽状に深い切れこみがあって、質はうすく、長さは5~7cm。10~11月頃、初冬に頭花を開く。管状花、舌状花ともに黄色で、頭花の径は1.5cmぐらいで、かなり小さい。その花がいくつか、長長と伸びた細い分枝の先端にむらがり咲く。そこで泡黄金菊の名がついたのであろう。花は花後、下を向く。本州、四国、九州に分布し、朝鮮、中国東北部にもある由。多く山の谷間に生育するので一名菊谷菊と呼ぶこともある。アブラギクとは、次に述べるシマカンギクもそう呼ばれることもあるので、混同を避けるため、アワコガネギク(一名アブラギク)、シマカンギク(一名アブラギク)と区別することになっている。

20. シマカンギク(島寒菊)*Chrysanthemum indicum* L.

キク科キク属の多年草。晩秋の頃、少し山地にはいると、日当りのよい傾斜地などにごく普通に見られる野菊である。草丈は30~80cm、葉は普通の家菊に見られる典型的の菊の葉で、形式的に言えば、卵形で長さ3~5cm、ふつう羽状に5裂している。10月から12月に、茎の上部に散房状に頭花をつける。頭花は径2.5cm内外、小振りではあるが、4cmに及ぶものもある。舌状花はふつう黄色であるが、白色のものもある。本州の近畿から西、四国・九州に分布し、朝鮮・台湾・中国にもある由。栽培される園芸種の小菊は、このシマカ

ンギクとチョウセンノギクとの交配種が元になっているともされる。かつて花を油につけて薬用に用いたことがあるのでアブラギク(油菊)の名があるとか。ハマカンギク(浜寒菊)とも呼ばれる。

18. イソギク(磯菊)*Chrysanthemum pacificum* Nakai

19. シオギク(潮菊)*Chrysanthemum shiwogiku* Kitam.

いずれもキク科キク属の多年草で、海岸の崖や岩の上に生育する。ただ分布するところが、イソギクは関東地方から静岡県あたりまでと伊豆諸島に限られるが、シオギクは紀伊半島にもみられるが、主に四国の徳島県の東海岸から、高知県の室戸岬をまわって物部川までの海岸に分布している。イソギクが、晩秋の海岸の崖や岩の上を、黄いろい花の群れで一面に埋めつくしている光景は、四国のシオギクの美しさと、甲乙をつけがたいと野草ハンドブック『秋の花』の著者富成忠夫は言っている。イソギクの茎は、はじめ長い地下茎を伸ばして横に這い、中ほどから斜めに立ち上って、高さ30cmから40~50cmぐらいの草丈になり、多くの葉をつける。この葉がまた特色のあるもので、倒披針形で、部厚く、長さ4~8cm、下面が銀白色の微毛でおおわれ、まるでピロウドである。それが縁をくまどって、更に若干表面にまではみ出し、まるで白く覆輪をかけたように見える。いかにも潮風に堪えてきたという姿で、形の面白さと相俟って、この菊を一層風情のあるものにしてている。そしてその花であるが、むろん、茎の上端に多数、散房状につくのであるが、周辺花もふつうは舌状花にならない、つまり全部筒状花ばかりであって、しかも中心花があざやかな深黄色ときているので、目まで黄いろく染まる思いをさせられる。黄いろく、ふっくらした和菓子の盛り合わせを思わせる。花期は10~11月。葉も花も美しいので、庭などにもよく栽培される。

さて、シオギクであるが、生態はイソギクとはほぼ同じであるが、高さは20~40cm、葉は長さ4cmほどでやや小さく、裏はやはり銀白色のピロウドで、それが余って縁に覆輪をかけたようになることは、イソギク同様である。花は逆にこのシオギクの方が一まわり大きく、舌状花は白色であ

るが短小で目立たれず、ほぼ黄一色に見え、まるで毛糸のボタンを集めたようで、やはり目を引く。

\*

以上、野菊とはいったい何なのか、と、ふと疑問をもって、身边にある非専門的な諸書に当たってみた結果である。そして、結局、『ジャポニカ』（『万有百科大事典』）19『植物』479頁の「野菊のぎく」の項に、

「キク科シオン属 *Aster* のノコンギク、ヤマシロギク、イナカギク、ハコネギク、シラヤマギク、サワシロギクなどと、ヨメナ属 *Kalimeris* のヨメナ、ユウガギクなどの総称。頭花がキク属に似ているので、俗に野菊と呼んでいる。夏から秋に開花して、山野や野原をいろいろしている」（佐竹義輔）

とあるのが、かなり妥当なところを言っていることを再確認したものの、しかし、やはり片手落ちであることを私は発見した。なるほど、ノコンギク、ヨメナ、ユウガギクは、いかにも野菊らしいものではあるが、キク科クリサンテムム属の、栽培種でない野生種のうち、たとえば、白い花で取囲まれるノジギク、リュウノウギクなども、りっぱな野菊のはずである。系統からいえば、むしろこちらの方が本家なのではないか。ハマギク、コハマギクとなると、海岸にだけ生えて、地域的にも局地的過ぎることは否定できないが、葉の様子などは、これらのものこそいかにも菊らしくある。そして野の菊にも、全体に黄いろいアワコガネギク、シマカンギク（アブラギク）、イソギク、シオギクなども、ある。黄いろい中心の管状花群を取りかこんで、白色もしくは淡紫色の周辺舌状花群が放射状に展開している、あの明るく、ほほえましいノギクの〈擬原型〉を、放棄する、というよりも、廓大して、黄一色の野の菊も、野菊の仲間に入れてよいのではないか。いや、これらも、れっきとした野菊であると私は考えるに至った。

そこで結局、キク科クリサンテムム属の野生種に、シオン属、ヨメナ属の若干が加わって、われわれの常識のいわゆる野菊を構成している、と結論するのが妥当であろうとするに至った。

従って『広辞苑』の「のぎく（野菊）(1)野に咲く菊。(2)ヨメナの別称」は余りにも簡易に過ぎる処

理だし、『角川漢和中辞典』の「野菊、やぎく・のぎく、①野生の菊、②ぎく科の野草の俗称」は、これまた無雑作に過ぎる処理である。しかし、野菊は音としてはやはり「やぎく」が本来で、「のぎく」はいわゆる湯桶読〔ゆとうよみ、2字の熟語漢字の、上の字を訓で、下の字を音でよむ読み方〕であった。「野に咲くクリサンテムム属の菊に、シオン属・ヨメナ属の、花が菊に酷似した若干のものを加えて、大ざっぱに野菊という」とでもすべきであろう。角川『合本俳句歳時記』の「山野に自生する菊の総称」という書き出しは、叙上見てきたところからは、無難ではあるが、しかし、やはり大ざっぱに過ぎる。

子狐のかくれ顔（がお）なる野菊かな 蕪村  
野菊折る手許に低し伊豆の島

正岡子規 〔これはイソギク〕

百丈の断崖を見ず野菊かな 高浜虚子

〔ノジギクは海岸沿いの崖地に多い〕

曇り来し昆布干場の野菊かな 橋本多佳子

〔ハマギク、コハマギク？〕

渦潮をうちわたり来て野菊あり 五十嵐播水

〔徳島のセトノジギクか、土佐のアズリノジギクか？〕

\*

最後に例の習慣から『大言海』をのぞいて見たところ、驚いた。

のぎく〔野菊〕(1)古名、カハラヨモギ。カハラオハギ。今、又、千本菊。よめな=似テ、葉ヤヤ薄ク小サク、尖リ多シ。花=一重、又、八重アリテ、色、黄ナリ。(2)又、よめな(姫菜)ノ一名。(3)又、あぶらぎく(油菊)ノ一名。

(2)よめなの一名と、(3)あぶらぎく(=シマカンギク)の一名は、問題はないけれども、これらを2、3位に廻して、(1)「古名、カハラヨモギ」となっているのに引っかけた。カワラヨモギ *Artemisia copillaris* Thunb. は同じキク科ではあるが、ヨモギ属の多年草で、川原や海浜の砂地に生える。草丈30~90cm。ヨモギの一種で漢方薬に用いられる由。カハラオハギは未詳。オハギはヨメナの古名なので、カワラヨメナとでもいうものがあるかと検索してみたが見当らなかった。千本菊はやはり未詳。千本槍(センボンヤリ)というキク科の多年草 *Leibnitizia anandria* Nakai というのは見出さ

れるが、やはりくわしくは未詳。

しかし、ともかくも、この記載によって、野菊という名前が、今日のような意味で通用するようになったのは、どうも比較的新しいことのようにあり、かつては、今の私には全く不案内である或る意味で、「野菊」というのが使われた時代があったのではないかと疑われる。

『日本国語大辞典』「野菊」の項に方言に言及してある処がある。それによると、アブラギク、リュウノウギク、ノコンギク、ヨメナなどを野菊と総称している地域はかなりあり、これは納得がいくが、ヒメジョオンやオトコヨモギをも、野菊と言っている地方も若干あることがわかる。ヒメジョオン(姫女苑)は、キク科のヒメジョオン属の多年草 *Erigeron annuus* Pers. で、よく似たハルジョオン(春女苑)と共に、明治初年、北アメリカから渡来した帰化植物で、今では広く全国に自生している。恐ろしく生命力のつよい雑草で、黄色の管状花を白色、または淡紫色の舌状花がこまかく健気に取りかこんでいる様は、菊によく似ているが、丸くととのい過ぎて何となく薄手で、菊の重厚さが無い。オトコヨモギ *Artemisia japonica* Thunb. はいうまでもなくヨモギの類である。こうなると、クイモやツワブキも顧みなければならぬかも知れない。クイモ *Helianthus tuberosus* L. も広い意味のキク科に属する帰化植物で、黄いろう花は若干菊に似ている。しかし、草丈が1.5~3mに達し、やはり草丈の高いシオンと共に、野菊の可憐さが無い。ツワブキ *Furfugium japonicum* Kitamura もキク科の多年草で、花は菊型であるが、花も大き過ぎ、葉も違いすぎる。ついでに言えば、高山植物のイワインチンは、*Chrysanthemum rupestre* Matsum. et Koidz. といって、クリサンテムム属のれっきとした菊である。見たところ、イソギクをそのまま南国の海浜の砂地から亜高山帯の寒冷な岩場に移したみたいである。ただ葉がヨモギの葉を細くしたようなところが、イソギクのいかにも菊らしい葉とは異なる。しかし、やはり菊は菊なので、葉裏には一面に銀色の毛が生えている。南アルプスや谷川岳などにも見られるが、主として長野県の亜高山帯に自生している。丈は10~20cmで、舌状花がなくて管状花ばかりで、黄いろく、手のこんだ小型の和菓子よ

うである。これは、高山植物化した野菊のわけであるけれども、高山に生えるので、野の菊の範疇からはみ出してしまった。呼び名もけっこう異様に、漢字でかくと岩茵蘂とむつかしく、岩の上に生えるものという意味であるとか。

\*

〔追加ノート〕

余白ができたので蛇足を加えたい。

『搜神記』(晋の干宝作、中国怪異小説の一つ)を読んでいて、菊酒に言及してある一章を寓見した。

「43.宮中の行事」

「九月には、茱萸(しゅゆ、和名カワハジカミ)を腰にさげ、蓬(よもぎ)の料理を食べ、菊花の酒を飲むと、長生きができると言われています。菊の花が咲いたときに、茎や葉といっしょに摘んで、とうきびや米とあえて醸しておく、次の年の九月九日になってやっとできあがり、それを飲むわけです。云云。」(東洋文庫10、竹田晃訳) 晋の時代といえば、西暦3~4世紀で、わが国はまだ歴史時代にはいっていない。その頃中国では既に重陽の節供が宮中行事となり、観菊の宴を催し、菊酒を飲んで長寿をことほぎ、祈願することになっていたのであろう。

それが新しがりの日本の貴人に、さっそくまねされたらしいことを、本文では聖武天皇の頃の長屋王(684-729)の事跡にかけて言及した。

\*茱萸(しゅゆ)=カワハジカミというのに疑問をもった。というのは、茱萸は普通のグミと和訓して、よく生垣などに利用する、枝に刺のある灌木で、春または秋、赤い実が熟する。十分熟したのは、食べてけっこうおいしいが、未熟のうちは、しぶくて、舌がザラザラになる感じ。あれを私は連想せざるを得ないので、ちょっと調べてみた。その結果ここの茱萸は呉茱萸(ごしゅゆ)の略で、喬木で、和名カワハジカミ、九月九日の重陽に高山に登ってこの実をとり、頭にさしはさめば邪気をはらうことになるとか。しかし「搜神記」では腰に下げるとなっている。

なお菊酒については、時代はずっと下るが、『譚海』(津村深庵著、15巻、寛政7年(1795)自跋あり)巻13に、言及がある――

「きく酒は壺に古酒をたたえ、壺の口一盃に懸る程に箆をつくり、箆の内にきくの花を、みつるほどつめて、壺をかたく封じ、静かなる所に収め置き、来年夏至の後、開き飲むべし。菊花酒気に蒸れて、悉くしほれからび、その花の匂い酒に移りて奇味あり。もっとも収むる時、箆の底へ酒の及ばぬようにすべし。若し酒にて箆を潤さば、菊花くされて酒気佳ならず。云云。」なかなか手のこんだものであるが、『搜神記』のとは、かもし方がまるで違う。私按ずるに、実際は、多くは、あり合う酒に菊花ないし菊の葉をひたし浮かべて飲んだのであろう。というのは、次に言及する菊水伝説と考え合わせると、花や葉がしおれてしまっはよくないようだからである。

謡曲に「菊慈童」（「枕慈童」というのがある。その典拠は『太平記』巻第十三「龍馬進奏ノ事」にあるとされる。そこに菊水伝説がかなり詳しく述べてある。周の穆王（ぼくおう）という伝説的聖王のもとに、慈童の君という少年が仕えていて、王にいたく寵愛せられていた。その少童が或るとき重大な過失をおかしてしまい、処罰は免れないこととなったが、結局、死一等を減じて遠流に処せられることになった。いよいよ流刑になるとき、王は「法華経」普門品にある二句の偈をひそかに授けた。帝城を去ること三百里の深山幽谷に流された慈童は、毎朝この二句の偈を唱えることとしたが、備忘のため、身近に見出された野菊の下葉にその文を書きつけた。その野菊の葉におのずから露が宿る。それが僅かにこぼれて、谷川の水にしたたる。ところがその二句の偈の靈験によってか、谷川の水がことごとく靈薬となり、味わい甘露のごとく、あたかも百味の珍にもまさった、とある。日頃これを飲で渴を医した慈童は、日日の健勝を得たのばかりではなく、不老長寿をも得て仙人となった。あの有名な彭祖がそれで、寿800年であったと言われる。その谷川の水を飲料水とする民300余家も、その余澤をこうむって、無病息災、いずれも不老不死の上、寿を保った、とある。

ところで謡曲「菊慈童」は話を魏の文帝の時代のこととしてある。魏の文帝の臣下が帝の宣旨を奉じて深山幽谷に分け入ったところ、齢700歳ながら、みずみずしい少年の体の怪人に行き合うと

いうことになっている。

このようにして菊の雫、菊の露、菊水、ないし菊の酒と不老長寿との関連は伝説として、遠く今日にまで及んでいるのである。

\*

子狐のかくれ顔なる野菊かな

という蕪村の句は、先に引いた。日本古典文学大系『蕪村集』の頭注には、「子狐と野菊との取合わせ。可憐なる野趣」と、蕪村の偶然な思いつきのように扱ってあるが、狐と野菊とは、それ以上に、どうやら、何らかの親縁関係があるようでもある。というのは、あの信田妻の葛の葉狐が、ついうっかり野干の正体を露わしてしまったのは、まがきに生えまつわる野菊にうっとり見とれてであった。今、浄る「信田妻」から関連のところを引用してみよう。葛の葉狐の説話というのは、つまり、危いところを助けられた女狐が、報恩の一つとして、女人に化けて恩人阿部の保名の妻となつて、信田の森に住み、幸福な家庭生活をいとむ。

「頃しも今は、秋の風、ふくろう松桂の枝に鳴きつれ、狐、蘭菊の花に、かく棲むとは、古人の伝えしごとく、この女房、庭前なる籬（まがき）の菊に心を寄せしが、咲き乱れたる色香にめでて、ながめ入り、仮りの姿をうち忘れ、あらぬ姿と変じつつ、しばし時をぞ移しける。……」そこを、わが子に、見とがめられ、ついに人間界に棲みはたし得なくなり、

恋いしくば、尋ね来て見よ、和泉なる、信太の森の、うらみ葛の葉

の歌を、かたわらの障子に書き残して姿を消してしまった。

ところで『白氏文集』凶宅詩というのに、「梟松桂ノ枝ニ鳴キ、狐蘭菊ノ叢ニ蔵（かく）ル」という句があり、この詩が先程の引用句に、古人の伝へしごとく、として言及してあり、謡曲で同じく、狐を扱っている「殺生石」にも、「ふくろう松桂の枝に鳴きつれ、狐蘭菊の花に隠れ住む……」と、又候引用してもある。そしてこの「蘭菊」はむろん、らんと菊、蘭草であつて、和名フジバカマ、秋の七草の一つで、キク科の多年草で野菊と関連がなくもない。やはり芳香があつて、昔は同じく芳香のある菊と並び称されたものようである。